
春雨

黒色 紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春雨

【Zコード】

N5112A

【作者名】

黒色 紅

【あらすじ】

二人の女の子が春雨の降る夜、桜を見に行く話です。会話だけで成り立つてます。

第一話

「春雨って知ってる？」

「ハルサメ？」

「そう、春雨」

「ヌードルのやつ？」

「いやこや違うから。春に降る雨の事だよ」

「それが？」

「情緒があつていいと思わない？」

「ふーん。そうかもねー」

「なにそのつまんなーいみたいな口調は

「ああ。ばれた？」

「ばれた」

「はいはい。で、情緒がなんだって？」

「春雨は情緒があるところ話」

「でも雨なんか降つたら桜とか散つちゃうよ」

「や」がまたいいんだよ

「そんなもんかね」

「うん。 そんなもん。 でやー」

「何?」

「明日は春雨が降るんだー」

「なんで分かるんだよ」

「私の第6感が言つてるの。 でね、春雨の降る明日、私と桜を見に行きませんか」

「まつ、素敵なお誘いだー」と

「」まかすな。 で、行く?つか、 来い」

「強制参加になつてゐや」

「春雨に打たれて桜の花びらが散つていぐ・・・・。 見たいと思わない?」

「強制参加なので何も言つまー」

「じゃあ、明日9時公園前集合ね

「つよーかい

「じや、あたし次化学室だから・・・・ってやばいーーー

「ほーら、チャイム鳴つやつた

「化学室遠いのーーー

「小久保によひへーねー

「早く行かんと。じやねーーー

第一話

「呼び出しがて遲刻か。 いい度胸だな」

「あはははは。 『めぐ』」

「わはははよ。 笑いながらでもなんでも」

「ハハハハ。 悪こと思つてるから」

「まあ いこなべれ」

「挨拶も済んだといひで、早速行け」

「わのせは挨拶だつたのか」

「じやあ、 いんばんは?」

「なんで疑問系?」

「・・・・・・ 懐かしいね」

「懐かしいつたつて去年の事だよ」

「でも、あたしも変わつたし、アンタも変わつたよ」

「わうかなあ

「でも此処は変わつてないよね

「此処は変わつてないね

「ああ、僕さすのめんどくさい

「アンタが春雨がこことか書つたんだらが

「あははは。まあね。あー桜散つてる。綺麗だね

「うそ

「去年も春雨降つてたよね

「うん。アンタが去年も春雨の降る日に行きたいとか書つてたから
ね

「やうだつつけ。去年も綺麗だつたよね

「うそ

「来年も来よう

「うそ

「あたしと、だからね

「ぐぐぐぐぐ

「他の人と来ちゃダメだからね」

「はーはー。分かってるよ。アンタもね」

「任せとこ」

「それにして、すいこ量の花びら」

「これ、どうするんだ」

「捨てるんじゃね」

「勿体ないね」

「土に還るよ、たぶん」

「やあやあ帰る?」

「えー。もつ?」

「うふ。寒くなつて來たし、もう一時間ぐらいこころよ

「……ほんとだ。最後に[アメ]でも撮り

「こころ

「いいー？・・・はい、キムチ」

「キムチ」

「後で送つとくね」

「ん」

「じゃあ月曜にねー」

「んー、バイバイ」

「遅刻すんなよー」

「あーー」

「忘れないよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5112a/>

春雨

2010年12月30日09時59分発行